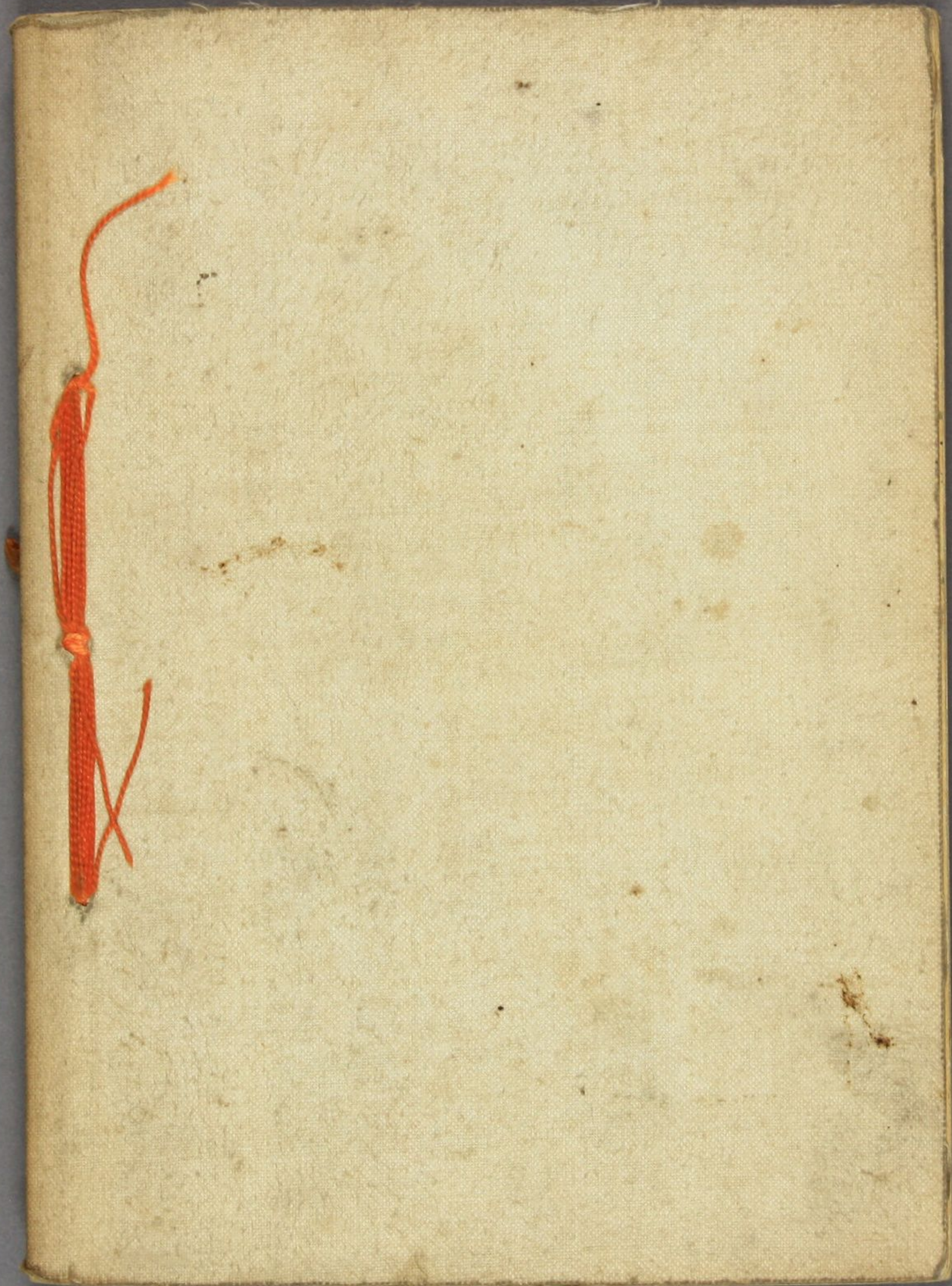


幼之春

董道









仲之春

薄田迄蓬

この巻を世に出すにあたりて何の言はんと
する所あらず。『ゆく春』はまことに野にふ
さはしき調のみ。唯歌うて感情をいつはら
ざりしを喜ぶなり。

挿畫は満谷國四郎君、輪廓は松尾素濤君の
筆になれり。こゝに舊友ふたりの厚意を謝
す。

目次

牧笛……………二
夕暮海邊に立ちて……………二五
夕の歌……………三〇
暗夜樹蔭にたちて……………三五
鐵幹君に酬ゆ……………四一
小鼠に與ふ……………五一
低唱……………五七
さまよひ……………六〇
夢路の關守……………六四

沙彌がうたへる歌……………六七
絶句……………
小狐……………七一
泉……………七三
桃園……………七五
惡縁……………七七
伶人の歎……………七九
遣愁……………八一
遠情……………八三
遣憤九首……………
一、狐に巢なすと誰かいふや……………八六

二、	亟相何とて無禮なるや……………	八八
三、	粘土の子凍りて息は無きに……………	九一
四、	願ふは清狂市にゆきて……………	九三
五、	曉若もの鋤をふりて……………	九六
六、	夕暮賤の男門にたちて……………	九八
七、	偽善者來れり蠟を塗りて……………	一〇〇
八、	昨夕は山田に水をそへて……………	一〇三
九、	夕飯のむしるに瓶子そへて……………	一〇五
罪……………		一〇八
うたげ……………		一一一
戀の矢……………		一一四

夏の白晝……………	一一七
謎……………	一二〇
歡聲……………	一二三
あゝ杜國（絶句十篇）	
一、類なき似而非者チエンバレンの……………	一二六
二、不毛國拓いて百合を植うる……………	一二八
三、議會に立ちたるクルウゲルの……………	一三〇
四、この國富めるの故を以て……………	一三三
五、一語に答へて足りぬべくば……………	一三五
六、死の手に延かれて去るといふも……………	一三七
七、白髯丈あるジユウベルトの……………	一三九

- 八、大風船吹く海を超へて……………一四一
- 九、海神願はく肩を垂れて……………一四三
- 十、地圖ひく人の子心あらば……………一四六

巖頭沈吟

- 一、なげきの巻……………一五一
- 二、のろひの巻……………一六三
- 破甕の賦……………一七六
- 鶯と蝙蝠……………一八一
- 郭公の賦……………一八四
- 野にたちて……………一九二
- 金絲雀を放つ歌……………一九六

- 『南畝の人』の小引……………二〇一
- 石彫獅子の賦……………二一〇

ゆと春

活量

挿畫目次

満谷國四郎筆

牧笛	………	二
泉	………	七四
巖頭沈吟	………	一五〇
石彫獅子	………	二一〇



牧笛

與作

君柏の樹のかげに坐し、
 根白の葦の莖吹いて、
 竟宴に無き清き音を、
 牧場の空に響かしむ。

澄める水面の花菖蒲

近水園

沼に尋ある根は延きぬ。
誰に得たりや、一節は
樂所に馴れし律にあらず。

吾作

去年長月の祭の日、
白晝小山の森に入り、
瑠璃囀するに聞惚れて、
吹く術得きと君は言ふ。

吾は渴ける牛ひきて、
谿の流に下りゆき、
石走り鳴る音に似せて、
この一節は倣ひ得たり。

與作

さればや、君が傳ふるは、
風吹く蘆の葉の響、
羽ある神の白き齒に

笛觸るゝやと疑はる。

姿單一の世に倦みて
憂ある身ぞ、慰めに、
日の暮るゝまで笛吹きて、
牧場の群は問はずあれや。

吾作

歌口嚙みて友の身の

長き愁をなだめ得ば、
終日山毛櫨の樹に凭りて
息絶ゆる迄吹かんもの。

吾には甘き小壺より、
君は苦きを味ひぬ。
愁ひとするを現はして、
友の慰籍を買ふとなせよ。

與作

日暮れて家に還る路、
葉守の神の靈術に
とる曳杖を失ひて
足悩む阪の夕迷ひ。

里なつき来る山男、
手がらみ森に凭るを見て

誰か恐怖と寂寞の
領する野邊を踈まざるや。

吾作

さはれ木の闇、罔象女、
身を童體に變化して、
さいめき更す勸盃の
快樂見る夜の忍び足、

知るや不覺に聲たて、
下座の小兵に怪まれ、
小走り門をくゝるまで、
笑ひ崩るゝ可笑さを。

與作

君が優しき本性は、
小闇き森の物の怪の
稚兒泣かしむる化精にも、

猶可笑味を現するや。

母の胸より産れし夜、

星は就れにかゝりしか、

吾は『現在』にし慊らず、

新なる日を願ふのみぞ。

吾作

深野の露の朝トめり、

圓き踵のぬるゝ路、

犢牛小躍り岡越えて、

朝日さす野へ飛ぶ風よ。

旅商人の額に見る、

眉のひそみも開かんを、

日頃親しむ君にして、

こゝに平和を認めざるや。

與作

よしや平和の名は得ざれ、
野に路迷ふ牛飼の
誇るに足らぬ務めより、
猶目覺しき世は無きか。
才ある友と名ある子と、
訴を解する女子の

趣きあるを買はんには、
寧ろ手飼も惜まざりな。

吾作

甘き泉に走る口も、
笛の音聞けば歸るもの、
今、商人の無慈悲なる
軛を君や敢てする。



眞實人すて、色白の
 若きに嫁きし婦は有り。
 檻を破りて野の路に、
 主人を踏みし牛はありや。

與作

見よ壘路の柳かげ、
 旅人ふたり急ぎ去る。
 行方は市路、白壁の

青葉隠れに見ゆる方。

あゝ世の榮は市にあれ、
 伽藍、學び舎、新館、
 才と掛想と歡樂の
 全き屯ぞ其處に見るよ。

吾作

市か。牛追ふ鞭の緒に、

花の芳き香を嗅がんより、
蛇の尾捲くも曳杖に、
家の子めくを撰るや君。

牛は泉の縁に往き、
夢は倦んずる胸に入る。
暫し樹蔭に君も伏せ、
牧場はひとり守る可きに。

與作

夢は優しき額をこそ、
和かき手に抱きよれ。
動ずる胸に捲くばかり、
性質猛なる身ならどよ。

唯野に屈む忍び泣き、
薊の花の紅の

涙に濡れし色を見て、
胸の憂ひを遣らしめよ。

吾作

岡這ふ日影飛び移り
古き精舎の蕨射り、
臆て虚空に消えゆきて、
遙かに雲の色染めぬ。

今巡禮は空を見て、
旅の愁ひを知る時か。
あはれ犢牛を檻に入れ
君も夕の乳絞らずや。

與作

絞る乳の澱練られては、
白帆に載りて海に浮き、
入洛、薔薇の花園や、

母に凭る兒の齒に吸はる。

あゝ静かなる春の宵、
都誇りの人も来て、
可笑味多き世語りに、
憂なぐさむる事も有れや。

吾作

去歲都路の旅の子が、

紅葉のかげに逍遙し、
日暮れて路も忘れしに、
宿せと乞ひし宵の闇。

燭とりて絞る白き乳の
襟に散る香を妻に問はれ、
答ありやと斷はりて、
闇踏ませしは誰が子なりし。

與作

惑まぎひ泣なく日ひぞ、和やはらかき
人ひとの言ことば葉はの嬉うれしさや、
神かみに感かん謝しゃす、過あやま失まちに
猶なほ笑わらましむる友ともあるを。

夕ゆふぐれ暮くれ牛うしは歸かへり來きて、
小こ舎やの邊へりに集あつまりぬ、

君きみと離はなれて世よの路みちの
荆いばら棘きの垣かきは踏ふむとせトな。

吾作

あれ柔にやわ和わなる目めをあけて
小こ路みちに待まてる群むれを見みよ、
静しづけき暮くれの空そらの下もと、
斯かる有う情じやうを誰たれに知しる。

いざ笛帯びて、踏み馴れし、
野路を左に往かしめよ。
翌日は柳の樹の蔭に、
また清き音を響かしむ可く。

夕暮海邊に云ちて

直黄、丹摺、紫の
雲藍色に収まり、
日の影徐かに薄れ行けば、
黄金浮けし波の穂の
搖ぎも底に隠るひ、
小兵の星のみくゞり出でよ

遠き空に光る外、
夜の幕全く空を閉ぢぬ。

島姫宿る巖蔭、

流れ緩き淵の上、

倦ずるかひなに揖をとりて、

白く光る鱗の

跳ねかへる音を聞きつゝ、

今漕ぎ歸るか蚕の子らは、

聞き浪路の夕暮、
わが岸何れと惑ふらんよ。

磯邊に立てる荒屋、

童女は早く眠りて、

女房厨屋に隙や得たる、

形よき貝の火盤を、

南の窓に點トて、

舟漕ぐ目路にと軽くするぬ。

渴仰あつき比丘尼の、
法會にともせる燭の如く。

夜次第に擴がりて、

引込走る音のみ

眞闇に知らるゝ海のかなた、

白き手すがる戸の上、

低き光の目標、

船人かへると思ひやれば、

胸に泌み入る平和に、
おぼえず涙を巖に垂れぬ。

夕の歌

巡禮にたちたる子を思ひて
母のよめる

夕ゆふべとなりぬ、日暮ひくれぬ、
黄雲きぐも細く旗捲はたまけば、
天路てんろに逼せまりし影かげも落おちて、
晝ひるの務つとめ地ちをば去さり、
次ついで來きたる闇くらき夜よの
小姓こしやうか、金星きんせい近ちかく降くだり、

繼子まご門もんに凭よる如ごとく、
目尻めじりもうるみて此處ここをまもる。

日暮ひくれは人ひとを痛いためて、
野のの旅路たびちを思おもはしむ。
吾子わがこは巡禮しゆんらい、遠とほく行ゆきて
消息たより得いざる悲かなしさよ。
ほむる姓せいの柔にう和わをも、
愚おろかや異郷いきやうの仇あだと怨あん
ト、

鳩はとに似にたる胸むねの血ちの
恐おそれに凝こるやと心こころなやむ。

汝なが行ゆく路みちの夕暮ゆふぐれ、
遠とほき京きやうの方かた知しらず、
磧かほらに冷ひえたる石いしに伏かすも、
絶たえず祈いのりて地ちに呼よべ。
和讃わさんを誦じゆする心こころは
枯野かれのを變へんトて花はなに飾かざり、

沙漠さばく越こゆる人ひとの子こが
青あをきを認みめし思見おもひする。

高たかき臺うてなものぞまど、
薰かをる衣ころもも願ねがはず。
蹉跎さだたる此世このよの長ながき旅たびに、
いばら、薊あざみの路みちより
吾子わがこひさたき許ばかりぞ。
行きしは巡禮じゆんれい、この夕暮ゆふぐれ

哀情切に泣くとも、
母戸にすがりて指は嚙まド。

青もさ羅のし思貝する。
心驚かぬ人の手紙
高も臺のさまや
薫る本も脚がす。
鏡の世の鏡も熱す
母戸にすがりて指は嚙まド。

暗夜樹蔭にたちて

人香なき間の手がらみ、
罔象沼の章に立ち
伏目にけぬるき水をまもり、
半夜現形に凝る頃、
倚るは櫟の木の暗、
依々たる夜の氣額にふれて

呼吸切に塞ぐまで
惑へる心をなやましむる。

天路走る流星の
遠き方に入る如く、
運命をびらに吾をのせて
行方那邊と知る可き。
死と夜と闇と恐怖の
跌める未来を思ひやれば、

疑胸に亂れて
現當いかにと分ちがたき。

香吹く日の曉
谷間くいる水に似て、
幸ある姿に歌ひ行けど、
ゆくて柏の木がくれ、
淵に落つる宿世なり。
來し方快樂の情をこめて

日毎誦したる唱歌の
いづれか挽歌の調ならぬ。

木精も眠る真夜中、
花に伏せる若人の
悲しきかたちを星は見るか。
疑解せぬ地の上、
詩歌、懸想頷ありや、
清きは絶えたる土にたちて

理想も何の力ぞ、
われ今現世のいのち咀ふ。

運命人を痛めて
この歎きに歩ましむ。
願ふは死の手か、希望なくも
常の平和其處にあり。
罪と汚れの酬、
人の子吾名を忘れ去るも、

高くかゝる星に似て、
榮ある座を享けぬべきぞ。

鐵幹君に酬也

與謝野鐵幹君、拙著暮笛集
をよまれて

さはいへ同じ寂しさを

こゝにも詫ふる若き身の

君が詩集をふところに

涙せきあへず打なげく哉

と結びたまへる一篇の詩を寄せらる

りのかへしにとて斯くは

夕暮吹ける牧笛の
耻づれば音も細かるに、

君^{きみ}聞^きけりとや、優^{やさ}しくも
涙^{なみだ}にまみを濕^{しめ}らせて。

由^ゆ來^{らい}才^{さい}なき人^{ひと}の子^こが
憂^{うれ}慰^いめの遊^{あそ}びぐさ、
嫉^{ねた}妬^みある世^よにこは幸^{さいち}か、
人^{ひと}延^ひくほどの音^ねも吹^ふかず。

然^さりな、野^の川^がの鶴^{せき}鴒^{れい}の

無^む心^{しん}のふしに似^にる可^べきを、
憂^{うれ}しや、吾^{わが}世^よの曉^{あけ}はやく、
怨^{うら}みの調^{てう}を覺^{おぼ}え得^にて。

物^{もの}に感^{かん}づて伏^かし沈^{しづ}み
薄^{うす}き縁^{へし}をかなしめど、
手^て相^ああやしきこの子^こには
秃^{ちう}筆^{ふで}ならで得^にられんや。

遂には飲げし瓶子より
したゝる酒をうち嘗めて、
これ趣味ありと盃の
圓きを厭ふ物狂。

君は有心者、市に行き
袖ほころびて歸るとも、
説くな吾がため、塵の世の
思むには過ぐる爲體。

煩ひ多き世を避けて
いま詩の領に甦る、
娶らず、嫁かず天童の
潔きぞ法と思ふもの。

髪の毛のほつれを厭はんや、
唯興來の幸なくて、
石を拾ひて玉と見る
智慧の惑ひを歎くのみ。

あゝ詠草を火に附して
地に一くだり残さずも、
有情の心、詩の神の
若き僕と呼ばればや。

悲みながき身に倦みて
寧ろ牧場の牛の群、
智覺なきをば願ひては
深野に泣くも斯かればぞ。

鴉、三十日経て野の水の
清き調べに似るものを、
歌へば吃る人の子の
生命の價君知るや。

あゝ詩の神の寵ありて
警策一首成らん日は、
黒く染めたる吾生の
幕落つる期にあらでやは。

せめては許せ、むる 甕かめ一つ、
泡あは咲くものも啜すらでは
餘あまりに胸むねの冷ひえゆきて、
笛かひ吹く息いきも堪たへざるに。

聞きけば秀才すさいら君きみを推おし
都みやこに詩歌しの集會しむる組むと、
譽ほまれある名なを身みにうけて
桂かづらの冠かむりながく得ねよ。

君きみが守まもる園そのともすれば
花はなの葉ははむ蟲むし見みるも、
蛇へびに路みちのく人ひとの子この
心こころ弱よわきに似にるなかれ。

君きみは先生せんじょう、情じょうあらば
吹ふく術すべ解げせぬ人ひとのため、
色いろくれなゐの唇くちびるに
先まづ歌うた口くちを合あはずや。

さば夕ぐれの一節を
森の小路に吹きまねて、
牧場がへりの野の人も
脚の疲れを慰めぬべく。

小鼠に與ふ

大阪に來り友金子の家に
寓す。眞晝水のむとて井戸
に行き、小鼠一つ倉の邊り
にさまよふを見てよめる

厨女皿を灌ぐとて、
水吹く管を開けしまゝ、
戸に凭る頃を窺ひて、
出でしや、鼠穴の巢を。

窓洩る光ほの暗く、
粉曳白の上うへに落ち、
人の形かたちを映うつすとみ、
怖おそるゝ勿なれ吾友わがともよ。

倉くらにこばれし米こめありて
三粒みつつぶの糧かてに厭あきたりや、
去來きよらい足あし並なみ小躍こおどりて、
快樂けらく孕はらむと疑うたがはる。

物陰ものかげづたひ往やきめぐる
低ひくき姿すがたを眺ながめては、
誰たれか夜よに盛もる盃さかずきの
底そこの薬くすりを悔くやまざる。

田たに米こめ蒔まきて稗ひね得にしや、
米こめ獲とて倉くらに満みたざるや、
人地ひとちの幸さちを思おもひ見みば、
鼠ねずみに糧かてを惜ましまざれ。

壁の壊れにくり入り、
脚そばだて何を見る、
胸に小さき智慧ありて
世の成りゆきを観ずるか。

あゝ詐欺に身は瘡せて
争ひ多き市の上、
影にも堪へぬ鼠子の
清き目を引く価値ありや。

聴け君、穴の暗きより
『きき』と物囓む響する、
今人の世の耻なきに、
鼠なくやと吾惑ふ。

自然に依りて足る可きを、
人營みて何をする。
囓むに故あり、願くは
神この穴に平和を。

あゝ鼠子よ此處に來て
暫しは吾と共にせよ、
誰が手か倉の白壁の
鳥羽繪に似たる笑をば。

低唱

若き女の歌ひたる曲

君ゆく路のかたはら、
草に點する花見ば、
家に寄する女は無くも、
手折らで去るな旅の子。

運命吾を痛めて、

若^{わか}き懸^け想^{さう}を碎^{くだ}きぬ。
野^のの花^{はな}手^てにも折^をられで、
朽^くちしに是^{これ}や比^ひすべき。

頸^{うなじ}にかゝる髪^{かみ}には、
鼎^{ひなへあ}揚^あぐる力^{ちから}あれど、
詐^{いつは}り多^{おほ}き男^{をとこ}を、
繋^{つな}ぎよるに長^{たけ}足^たらず。

形^{かたち}圓^{まる}き石^{いし}垣^{がき}を、
燃^もゆる胸^{むね}にかき抱^{いだ}き、
慰^{なぐさ}めも無^なき怨^{うら}恨^みを、
消^けすとすれど甲^か斐^ひも無^なう。

媚^{こび}に踈^{あそ}き唇^{くちびる}を、
乳^ちより白^{しろ}き齒^はに噛^かみて、
ながく走^{はし}る吐^た息^{いき}の
色^{いろ}紅^{くれなゐ}となる迄^{まで}も。

さよふひ

あゝ戀人の手に凭り、
野路を行くは誰が子ぞや
くゝと呼ばふ鳩に似て、
脚は軽く草ふみぬ。

薫り深き唇の
くちづけだに堪ふ可くば、

戀ふる仲と誰か知る、
唯妹と君を見て。

野守の鏡越えずば、
肩になびく汝が髪を
胸に捲いて歩むとも、
己れにして耻はなし。

圓き珠は失せがちに、

懸想の羽疾かりや。
左、胸の上におき、
右、やはらかに抱きよる。

野路の棗赤らみて、
味はふべく樹に懸る。
あまりに胸の渴くに、
枝折るひまを許せな。

君にねがふ野の守
木暗に聲を聞くととも、
情ぞ、路を離れて、
吾等の夢な覺しぞ。

夢路の関守

甘き眠君に落ち、
玉手曲げてまどろめば、
手に桂樹の鞭とりて、
寄るを叱り夢路守る。
君めざめて唇に、
密ある笑を見ん迄、

母戸に立ちて訪ふとも、
何條こゝを去るべきや。

市女呼びて香油を得、
長き髪の毛に塗るや、
興味得たる繪匠の
絹に刷毛を揮ふやう。

夕、君と抱く時

移り香深く薫トて
快樂たける宴會の日、
友美む身とどなる。

沙彌がうたへる歌

華籠に盛れる木蓮は、
香爐の灰冷えしまゝ、
脆く落ちて行春の
ながき愁を止めぬ。

深く責めな春の日を、
鐘擣男花に酔ひ、

時の數を忘るとも、
そは笑ふべき罪なり。

詣でし歸る子を呼び、
春の齡を問へるに、
君も見よと羅衣の
袂ふりて急ぎ去る。

今、鐘樓に攀ち上り、

遠く浮世を望めば、
百里途もつくる方、
春はかなく落ちんとす。

あゝ若きは酒くみて、
甘き夢に興がるを、
獨り冷えし堂に入り、
破れし帙箆をや解くべき。

願ふは、魔よ毒さして、
才なき石と變せよ、
さば永劫朽ちもせで、
春戀石と名を得んに。

絶句

小狐

怠たる僕を切に呼びて、
晝の間籬を固く結へど、
人なき折々のび入りて、
小狐春の夜鳩をぬすむ。

一夜は宵より庭をめぐり
三たびか鞭もて追ひしものを、
夜ふけて林檎の下葉がくれ、
守る身も忘れて夢に入れば、

此は又、下枝の風にのりて、
語るよ、小狐聲も低く、
母見ぬ闇路を庭にかくれ、
人の子戀ひ行く汝が身なるを

雛鳩與へよ、否といはひ、
翌くる夜鳴かんか、君が影に。

泉

樹蔭の泉に誰を見てか、
可憐や、少女子水も掬まず、
顔うち赤らめ疾く去るとて
水瓔碎くな、道は狭きに。



夏のひやまちに九里を馳せて、
都の旅人渴きたるに、
顔よき少女よ、情あらば、
せめては投げても柄抄貸せよ。

湧き散る泉に深く掬みて、
重なる歎きを忘れ得なば、
水甕抱いて君と共に、
吾世を榎のかげに老いむ。

あゝこの泉いづみとわが情なさけと、
共にともし掬くまは幸さちあらずや。

桃園

隣となりの桃園ももぞの木葉きはしげく、
人目ひとめを忍しのぶに頼たよりありと、
曉あかつき木この間まにかくれ入りて、
往來わうらい懸想けんさうの歌うたをつくる。

詩の名は、『岩根の戦争談』、
落武者郷士の姪に懐き、
夏の日、兜の矢目を指して
當時かたると言ふにあるよ。

句を切る手拍子六度ふりて、
今猶矢さけび興にのらず、
小道の道途爪を痛み、
足惱み立てども歌を見んや。

透には口癖、疲れたりと、
葉がくれ熟せる桃を盗む。

悪縁

何等の悪縁、市に立ちて
媚ぶるに堪へざる弱き性、
文集興がる癖もなくば、
身を切る痛みを胸に得んや。

詩成れば終日窓に俯して、
愚かや、寂しき笑に入れど、
佳き句も嚙むべき味はなきに
家刀自怨トて饑を訴ふ。

金鴉は忠實なる雛を産めど、
詩人は子の縁無きに似たり。
覺らば夙くより鋤を負ひて、
百歩の圃に勞す可きを。

許せよ瘡せたり。君を捲いて、
泣くにも堪へざる腕なるに。

伶人の歎

庖丁厨に鶏は割けど、
君子の團欒に席を得んや。
似たりな、伶人、笛を秘めて
今日より無禮の前に立つな。

凡俗威を振る胸のうちは、
美き音が借るべき宿ならず、
譏刺の附子矢を背に負ひて、
歸る日無くんば幸とすべし。

流人の名を得て家を離れ、
饑えては野末の石に伏すも、
市女が屏のかげに寄りて
吹かんや、媚ふるに笛は帯びト。

笛には譜あれど、不如意なりや
此世に吾等の顔はあらず。

遣愁

斯くては布衣の子入洛何日か、
海棠哀れに花は笑めど、
悩む身いま又胸を痛み、
無常に感トて頭くだる。

夕暮驛路に酒を喚びて
飲けたる盃口にふくみ、
賦するは「遣愁」、歌は成れど
藝苑いつまた吾を入れむ。

酔うては破れし窓にもたれ、
倦ずる童子の形に似るも、
執着去らざる道はあるを、
暫しも反古をし忘るべきか。

火影の低唱、眉をとちて
痩せたる詩風に泣くを見ずや。

遠情

今宵は金星青味帯びて、
射る影寂しく胸に入るに、
戀ふる子遠情忍びがたく、
流れの邊りに啜り泣くよ。

母戸にもたれて指を噛めば、
少人感じて山路かへる。
今手に動ずる胸を押して、
聲呑む悩みを誰し知るか。

行く路難ある旅の空に、
黒髪ながき子何を思ふ。
情ある男の腕ならで、
夜の夢たひらに守り得んや。

手枕やつれし恨みあらば、
誰が罪、吾かや吾は知らじ。

遣 憤

九 首

一

國歩やうやく惱まきに至り
亟相かくれて湘南に入る、たま
たまこゝを過ぎてよめる

狐きつねに巢すなしと誰たれかいふや、
人見ひとみば逃のがれて窟ほらに入るを。

譬たとへば亟相しやうしやう彼かれに似たり、
困こせば屢しばしばこゝに隠かくる。

民たみ皆みな足あし惱なやむ時ときにありて、
館やみだに女めを見みる耻はぢとせずや。
身みはこれ布衣ふいの子こ、門かどをよぎり、
足あしずりもがいて君きみに惜をしむ。

若もし神職かみつとめ分に忠實まじめを見ずと、

名折をむくゆる事もあらば、
憂い哉、千載魂は落ちて
名譽の關所は君にあかど。

亟相起たんか。訴ありと
雜人階下に充つと聞くに。

二

地租増徴案の事ありよりこの
かた、政界賄賂公に行はれて道義
全く地に落ちぬ。罪は斷じて其原
に歸すべし。

亟相何とて無禮なるや、

路墾りなやんで泣くもあるに、
名聞買ふべく民をはかり、
險しき方にぞ惑はしむる。

往くもの責あり。これに比して

誘ふは倍する罪を負へる。
罪なほ厭はど、怖るべきは
歴史を耻辱の影とせずや。

陥り易かる民を擧げて
死と夜の傾なる窟にくたり、
永劫消えざる焔あびて
三世の裁判をうくる時ぞ、

喜べ丞相、冥府の門に、
先づ身を焼かれし名をば得んに。

三

民衆の信仰落ち、道義すたれて
風俗日に頹れゆくを、教導の任
にあるもの關はり知らざる如き
ものあるは何故ぞ

粘土の子凍りて息は無きに、

天部の火を借り焼くとせずや。
先生早くも道に倦んど、
鼓吹のつとめを思むに似たり。

斯くては渴仰土に落ちて
民みな歸するによるべあらど、
神人禮する風儀成りて
何の日新代こゝにつがん。

枯木に花咲く時はあれど、
信なき衆生は榮え得んや。
我執と野鄙の流布に堪へで、
自から滅ぶる、幸とせんか。

厭ふは懈怠よ、友を延きて
首の座令ずる果ぞ見する。

四

傳道のつとめに在るもの、教祖の
いましめを忘れて、只管に俗衆の
意を迎へんとす、うれひて咏める、

願ふは清狂、市にゆきて
童子の笑を身には買ふも、
足ふみ、手拍子調を切りて
詩歌の入興に酔ひぬべきを。

何の意、僧正道に惑ひ
大なる門より民をひくか、

遂にはちめ人見るに堪へで
沈淪の直路と敢へて呼ばん。

地の事不斷に似非に入るを、
朽つる名買ふべく民に媚る、
愧ぢずと思ふや。筆を投げて
道には殉する人もあるに。

凝る可きつとめに勞を見ずと、

詩の難、今の日むしろ享けん。

五

節操なき議員のもとに地租増徴
案の成るや素朴なる郷里の民も
激する所あるに似たり

曉、若者鋤をふりて
山路を走るに故を問へば、
野兎一匹麥を噛みて

逃げきと彼方の荆棘指すよ。

暗の夜、洞窟の饑に堪へで、
兎は三坪の麥を踏めり。
知らずや山賊吾も知らで、
五百代小田なる稻穂刈るを。

そは君、闇浮の路にまよひ、
隣を欺き、友をはかり、

朽ちたる築地の影によちて
位を、富をと呼べる痴者ぞ。

兎は追ふ可し、痴者は打ちて
罪ある汚れの跡を絶てよ。

六

夕暮賤の男門に立ちて
可憐や暫らく恨み泣くよ、
「われ歳六十老に入りて

生命の苦痛を今宵知りぬ。

吾子は三歳を衛士に撰られ、
百歩の桑圃草に荒れぬ。

今手に鋤とり畔にたてど、
あゝまた壯なる田子に非ず。

村長昨夜人につて、
租税をいそげと切に言へど、

厨くりやに菜なもなく饑うえし子こには、
數す錢せんの貯たくはへむしろ夢ゆめ』と。

これ詩しならんやは、喘あへぐ牛うしに
季きを知るし亟しやうく相いま今は無なきか。

七

かの政客といふもの恣しに民の血を絞し
りながらまた遊説と名づけてこ、か
しこを駈かけまはるいとあさまし

偽ぎ善ぜん者しゃ來きたれり、蠟ろうを塗ぬりて

諸もろ耳みみふさげよ、然さらであらば
蜜みつある言ことの葉は内うちに入りて
耳みみだれ患うれふる時ときもあらん。

見みんともすべしや、道みちに厭あきて
靈れい魂こんくもれる顔かほの色いろを。

戸とに來きて訪たづねども人ひとは開あけず、
野のに行ゆき呼よばへど神かみは聽きかず。

宿^まだに貸^かせとや、竈^{かま}の前^{まえ}に
偽^{いつは}り多^{おほ}かる人^{ひと}を延^ひきて、
妻^{つま}子^こに見^みせんは耻^{はぢ}と思^{おも}ふ。

今^{いま}野^のに守^{まも}りの絶^たえて無^なきに、
なう來^こよ若^わ者^{もの}、夜^よ頃^{ころ}訪^まひて
葡^ぶ萄^{たう}を盜^{ぬす}める狐^{きつ}を追^おはん。

ハ

ゆ^ゆうべは山^{やま}田^だに水^{みづ}をそよぎ、
勞^つれて結^{むす}びし夢^{ゆめ}路^ぢ淺^{あさ}く、
曉^{あけ}方^{がた}ほとく門^{もん}をうつに、
開^{ひら}けば旅^{たび}人^{びと}二人^{ふたり}たり。

巫^い子^こと名^なのるよ、弓^{ゆみ}をふりて
諸^{もろ}手^ての不^ふ思^し議^ぎを稱^たへいへど、
吾^{われ}今^{いま}心^{こころ}に平^{へい}和^わありて
死^{しり}靈^{やう}の怨^{うら}みを聞^きくに堪^たへず。

巫子よ教へん、弓を折りて
今日より吾等の門に立つな、
其は唯罪なり、清き民の
惑ひを招くと常に聞くを。

巫子よ疾く去れ、吾はおりて
かの田に生ひたる莠ぬかん。

九

夕飯のむしろに瓶子そへて、
疲れを忘ずる濁り酒の
快樂ぞ、民には驕奢なりと、
盃うばふを誰と知るや。

まめ人憤りて優しき目に、

怨ずる涙をふるふ夕、
審判ぞ下れや、力猛に
血を見で止まざる酬あらん。

見よ、荷を奪ひて走る者は、
重みに堪へずや路に倒る。
あはれは痴者、これを知らで
わが身の墮つるを急くに似たり。

サタンも斯くこそ。民よ頼め、
善いかな霄壤道は絶わす。

(遺憤畢)

罪

「夕ぐれ集會あり、堂に上れ、
先生きたる」と示あれど、
身ひとり樹蔭に隠れ入りて
懸想の痛みを忍び泣きぬ。

素より成道興にあらず。

願瘡せても祈るべきを、
若きぞ罪なる、人を見ては
無着の心を得るに堪へず。

聞け、今讚美歌堂におこる、
世の路よけたる報ありて、
友みな行功幸を見んに、
信なき身のみは罪に入るか。

罪をも厭はし、人もあらば
凭りても泣かんを、人も去りぬ。

うたげ

春の夜うたげの蓆ながく、
酔ひしや、主人は眉をあげて
語るは掛想のむかし談、
盃ふくみて聞くもあるよ。

賓客、家の子、入興ありて

吾にも許せと口を細め、
顔よき少女子近う呼びて、
半らは盡きたる瓶子とれり。

福田われらの願ならず、
腕の白さに凭らば足りぬ。
味よき車を縁と見よと、
家の子みづから足るに似たり

あれ見よ、少女は恥に酔ひて、
うけたる盃膝になげぬ。

戀の夫

祈年祭のさむき夕ゆふべ

羽ある神の子狙ひ得しや、

戀の矢心臓に傷を穿ち、

疼みにこらへで吾を病める。

弱胸わづらふ、誰によりて

小さき平和の手にもすがる。

かなしき調を口に誦して、

みづから慰むつらきものぞ。

懸想と詩歌を酒に組みて

若きが酔ふべき三の小壺、

趣味ある友とは誰かいふや。

苺は熟して市に入れど、

吟身ごんしんいまなほ愁帯うれひびて、
わが詩しは宴會うたげの興きようにのらず。

夏の白晝

野莓いちごの葉はがくれ光ひかりよけて、
蜥蜴とめけも眠ねむれる夏の眞晝まひる、
静しづかに南みなみの窓まどにもたれ、
黒髪くろかみながきを思おもひ慕したふ。
をりから牧童ぼくだう笛ふえを吹かきて、

無心の調子も情に入るに、
遂には得堪へず庭におりて、
木闌の小路に隠れ入りぬ。

あゝ野の小羊水を飲むと、
ぬるめる流れに走る頃を、
似たりな、わが身も心饑ゑて
運命孤なるに啜り泣くよ。

年齢の若きぞまこと幸無
晝、夜感トて愁たゑず。

謎

男おとこの心こころ臓うでと桃ももをもりて、
小皿こざらを少女せうじよの膝ひざにおけよ、
白しろき手て觸ふるゝは此方こなたならで、
片頬かたほの紅あかめる甘うまき木この實み。
植うゑなば木この實みも芽めをば吹ふいて
ぬくむる光ひかりは感かんずべきを、

掛想けさうの鍵かぎにも開ひらきがたき
女をんなの心こころどかたくなゝる。

あかつき花はな吹ふく園そのの繁しげみ、
天女てんによの石彫いしぼり、顔かほは似にるも
永劫やうこふた燃たえざる胸むねに似になと
言いひしは誰たが事こと、人ひとも知しるや。

君きみにと投なげたる謎なぞは解とけで、

ことしも寂しう春は暮れぬ。

歡 敵

邦に慶び事ありける日空を
仰ぎてよめる

歡喜の音聲そらに響き、
巖戸にひきたる幕を揺れば、
故はと、天人雲にいで入、
樂所のかたをぞまもり見たる。

下には萬民酒をくみて、

幸ある斯日の祝詞かはし、
夕はちまたに松明ふりて、
光榮はこゝにと狂ひ呼ばふ。

美いかな、本性今ぞ見ると
嘉すか、天人令旨うけて、
雲みな國見の臺をはなれ、
灘經て二千里遠く去れり。

あゝよし照る日を顔に浴びて
吾らは祝宴に興ド得んよ。

あ、杜國

(絶句十篇)

十九世紀末の歴史に世にまたと見る可からざる光彩を添へたるは英杜戦争なり。この小さきを以て彼の大なると争ふ、果は知るべくして而かも義しきはまぐべからず、民を擧げて邦と共に斃れんとす。これを思ひて感慨なからんや。絶句十篇をつくる

一

類なき似而非者チエンバレンの
破壊には長けたる力厭ふ、
横さに歩むは蟹に見しが、
この子も直路をたどり行かず。

斷頭臺王者に植ゑしところ、
今はた義ありや、吾は惑ふ。
塵穢の頭人たかく揚げて、
無禮を許すに何の名ある。

あゝ世に誠の情足らず、
孰れか大衆の民をひきて、
本性高きに導きつゝ、
歴史の光榮をつくり得しや。

形の化粧に心酔ひて、
總てを捨つるは幸無いかな。

二

不毛國拓いて百合を植うる、
隣りに何等の家損ありや。
百合花開いて手折るべくば、
籬を擴げて領を論ず。

足音に逃れて去るを見れば、
狐も小さき耻は知りぬ。
白晝に物剝ぐ人の子らに、
基督あがむる名を許すや。

審判は御空の高きよりか、
はた地の心の清きよりか。
永劫世を見る神の前に、
運命を命ずる道の前に、

義しき名を得し跡を知りて、
譏刺の歸するを分つべきに。

三

議會に立ちたるクルウゲルの
慣れる調子を耳にせずや、
「敵あり、天父の知れるところ、
戦とり勇みて往かざらんや。」

強きは戻道旗にあげて、
弱きを虐ぐちからありや。
弱きは壓るゝ時し有るも、
權にほるふる「道」はありや。

領土りょうどの存亡そんもう今は言いはど、
わが前義まへぎと名なと踏ふれんとす。
犠牲いけにえ要ひらする何なんの時ときぞ、
世よをして總すべてを忘わすれしめよ。

善よいかな、『天父てんぷのしれる所ところ
戦ほことり勇いさみてあらがふ』と云いふ。

四

この邦富くにとみめるの故ゆゑを以もつて、
思いむべき葛藤もつれの斷たへずあらば、
ヨハネスブルグの路みちを塞ふさぎ、
金堀かねほる真洞まほらを土つちに埋うめよ。

荒金あらかね真金まかねのたより無なきも、
人ひとの子こ絶たえんや、斯ある時ときぞ、

思想の高さを胸に探り、
世路の清さを歩み得べし。

護るべき任ある清き民の
平和を亂すは何の國ぞ、
基督の民、—基督の領—
自ら稱ふる耻ないかな。

大なる掌こゝに下りて、

人業こぼたん日をぞ祈る

五

チエンバレンのすがた繪を見て

一語に答へて足りぬ可くば、
汝を知らずと敢て言ふよ、
冷嘲帯びたる顔の色は、
正路を踏む可き相にあらず。

宗教の秘密はクルウゲルの
錆びたる額に眺め得たり、
汝が顔より拾ひ得るは、
獸物に能く見る無情のみぞ。

鵝に群れ居る鳩は下りて、
馴れざる水面を踏むといへり、
似而非者幾つを見まく欲りて、
民衆後方に高く呼ぶや。

この子を崇むる邦の不幸、
石階拜むを寧ろまざる。

六

杜國の軍務總督ジユウベルト將軍こと一三
月廿八日を以て逝りぬ、死する時枕をあげ
て『慙む可き民よ』と嘆しけりと聞きて、

死の手に延かれて去るといふも、
邦の名今なほ忘れ得ずや。

將軍目を瞑ち嘆トけるは、
「慰むべき哉國の民」と。

悩むな、孰れの孫かありて、
バアルの流れを横に過ぎり、
自由の領土を拓き得たる
歴史の名譽を汚すべきや。

あゝ吾、南の共和國の

榮ある敗軍を聞ける毎に、
思ふは流星、遠く飛びて、
天路に隠るゝ清き姿。

消えしはこれ有り。然はあれど
いまはも光を闇に曳きぬ。

七

白鬚丈あるジュウベルトの

言葉ど雄々しや。人に言へる、
「鞭を頸にかくるあらば、
誰が手が劍に拂はざるや。」

自由よ、生れて何の幸ぞ、
汝が名は掛想の人に似るか、
聽いては將軍こゝる勇み、
鐙に跨ぐを辭せずといふ。

知れりや、南方清き邦の
柱ぞ『自由』の石に立てる。
礎ぬかれて忍ぶ可くば、
國の名掲ぐる理由あらんや。

自由よ、壓るゝ時し來るも、
護る可き手あるを神に謝せよ。

大風船吹く海を超へて、
南に五千里、遠きかなた、
民みな禮ある共和國の
現狀おもうて心痛む。

戻道のけぞる世とは知れど、
「清き」を餘りに力なくて、
再々行手に伏すを見ては、
誰が子か惑ひに沈まざるや。

左もあれ、無類に清き民の
罪無き死骸を沓にしても、
汝が名を呼ばでは堪へ得ずや、
勝ちたる軍を不幸なりな。

敵手の忿怒は壓へ得べし、
歴史の汚れは何日か消ゆる。

九

杜國大統領クルウゲル海を超えて歐
州に航すとの報を得たる時詠める

海神願はく肩を垂れて、
この日は諸手に浪を揺るな、
大なる靈魂傷を帯びて、
白帆を揚げたる船に伏せり。

吹き散る海の香顔を打ちて、
『南の回歸』に落つる所、

不幸のうまれよ、民悩むと、
王者(クルウ)は老いたる額を垂れぬ。

あゝ彼の尊き御名に依りて、
義しき叫びを野に揚ぐるも、
白色人種に答ありや、
世の道まことに非違ぞ多き。

思へば情ある白帆なりや、

流人を擁いて海に避けぬ。

十

地圖ひく人の子心あらば、
バアルの左右なる邦の色は
小指の血に塗れ、非義と打ちて、
眞實人三萬こゝに殪る。

いまの代未來に傳ふ可きは、
蒸氣と電氣の智慧に非ず、
バアルの左右なる邦の姿——
消えざる汚辱の跡に有るよ。

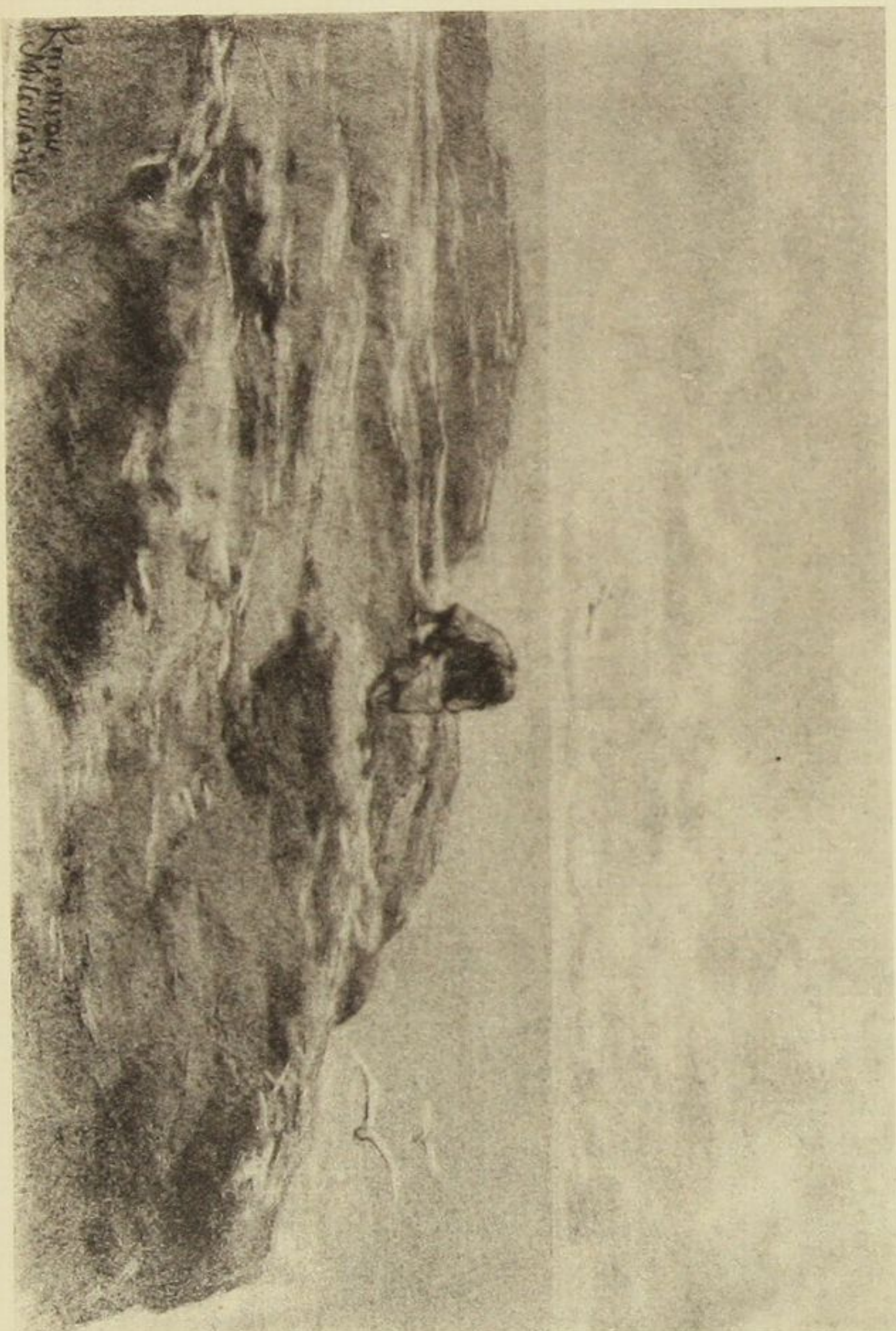
博士は宗教を弄ト去んぬ、
天意は二様に説くを得べし、
斯くては世の事清き子らの
悲しき呪咀を價ひせずや。

あゝ人何時まで闇を踏むか、
まどひぞ永劫天に歸する。

(絶句畢)

巖頭沈吟

相慕ひける男女ありけり、月花の
遊びにつけてかたみにいたはる事
並々ならず、心なき友だちか嫉み
の噂絶はける日もなかりしが、ふ
と誰知れず女海こぼて日向の國へ
と去りぬ、其ゆゑよしを知る人な
し、男歎きに堪へず思ひくしたる
風なりしがつひに女が航したる港



の波止場より海に投じて身をなく
しぬ、男は詩歌の道に淺からずゆ
くするは騒壇に立ちて名聞を博せ
ん望みあり、自らも爾かねがへり
しを惜みても餘りある事なり、女
はた書よみて道をもわきまへたる
を如何しけん男の身の果をも聞き
しや否や、孰れも名を厭ひてこ
には掲げず。

卅二年十一月

一、なげきの巻

空そら藍色あゐいろに晴はれ渡わたり、
波なみゆきかへりのたくる日ひ、
よるは巖いはかげ海うみの香かほの
籠こもりて玄くろめる洞ほらの壁かべ。
水すい平へい線せんに尾おを垂たれて、

雲薄色に曳くほとり、
心自然にあくがれて、
市のとよみは遠ざかる。

倦んずる童女母により、
野の戯れを玄のぶ如、
今海ながめ、追懐は
遠く去りたる人の上。

その子餘りにつらかりし、
慕へる吾を後にして、
白帆のかげに身をひそめ、
波のかなたに往きしかな。

干瀉に落つる貝の葉に、
盛るべき程の情あらば、
低き波止場の舟よそひ、
手招すれば足るべきを。

往ゆきにまたし方いづれは何方どと、
巖いはにのぼりて眺ながめしも、
波路なみちのはては灰色はいいろよ、
涙なみだながれて見みえわかず。

せめて慰なぐさむ術すべもやと、
歌うたに心こころをかへせしも、
背そむきし罪つみか詩しの神かみの

替たすけありとも思おもはれず。

笛ふえの手て何か、きよき音ねは
安やすき身みにこそ興きようを見みれ、
人ひとを怨うらみて動ごうずる身み、
唯ただ泣なかしむる節ふしばかり。

日向ひらがの國くによ草くさふかく
露つゆしげき野のと聞ききにしが

君きみはいづくをさまよへる、
和手やて懸かくべき肩かたありや。

あゝ聖きよい哉かな、天そらの上うへ、
戀こひ知る女め神がみ詩しをも知る、
女をんなこゝろを委ゆたねんに、
歌うた人びとなにか足たらはざる。

歸かへれ戀こひ人びと、唇くちびるは

胸むねの焔ほのほに渴あはきたり、
君きみかへりこむ其その日ひまで、
また花はなびらに觸ふれもせど。

鳴なくを引ひき汝しほおちゆきて、
再ふたび島しまにかへる時とき、
浦うらに鴨かも見みぬ恨うらみ得いて、
悔くひすや、君きみは永とこ久こほに。

身は眞實男、人の世の
苔の花の血を染めて、
世に入る門の戸の羽に、
怨恨のあとをしるさせな。

胸のいたみに堪へかねて、
足音低く歩みより、
獨りひめたる君が名を、
干瀉に深く書いて見る。

あゝこの文字の永劫に、
消えどと聞かばわが戀の
足らんを、若しや夕潮の
頭もたげて寄せもせば。

歸れ戀人、唇は
胸のほのほに渴きたり、
君かへり來むその日まで、

また花びらに觸れもせど。

夢か、會うてはかき擁き、
人憚りの接吻に、
戀のうまささに酔ひたりと、
そと囁きて笑みし日は。

戀する人に健忘と、
つよき心臓を與へずや。

いま悲哀に、過ぎし日の
快樂おもふに忍びじよ。

不幸なる哉、白き手に
詩の清興を捨てしより、
名譽まれなる桂の葉、
とはに頭にまとい得ず。

いま又君を失ひて、

戀こひの盃さめづき 覆くつがへる。
かくて人ひとの世よに首あひくちの
氷こほれる肌はだに足たらんのみ。

手て負おひの鷺わしの巢すにかへり、
翼つばさを嘴くちばしみて鳴なく如ごとく、
巖いはにすがりて咽むせび入いる
男をとこありとは知しるや知しらずや。

二、のろひの巻

見みよ龍宮りゅうぐうの反そり橋はしか、
なぎたる空そらに虹にじかゝる。
人ひとまどふ世よに何なんの榮はなぞ、
二ふたつに裂さけて海うみに落おちよ。
そら地ちと絶たてよ、上うへに星ほし

下に野の花、なかに戀
神の飾りと聞けりしを、
人の花まづ碎けたり。

残るは富に、智慧に、名に、
言葉に、道に、偽りに、
宗教の疲れ、盲の理——
足りぬ、汚辱の帆章よ。

潮の香揖にけぶらせて、
舟漕ぎかへる鯉魚釣、
海幸いかに多くとも、
人待つ岸に繋がざれ。

平らに見ゆる妻の胸の
底の浅きにくらべては、
花藻のうかぶ淵の上、
浪はありとも住みやすき。

われは隠れ家こぼたれて、
頼る方なきひとり兒ぞ。
昔の榮の追懐の
鞭いたらぬは、——君よ死か。

あゝ悲みの人の子に、
死は故郷の思あり。
あゝ望なき人の子に、

死は整へる姿あり。

胸もあらはに衣裂きて、
濃青の淵にのぞむとき、
母の腕による如き
安きおもひのなからずや。

あゝ可憐なる女子に、
千歳とけぬ呪咀あれ。

男契りをやぶられて、
若き生命をうしなふよ。

あゝ可憐なる女子に、
千歳とけぬ呪咀あれ。
男癒えざる傷を得て、
清き心を葬るよ。

かつては白き指觸れて、

愛と詩の家と戯れし
胸絶壁につきあて、
皮膚くぢかん時ぞ今。

かつては腕やはらかに、
わが寶ぞと抱きたる
額大浪に洗はせて、
潮に沈まん時ぞ今。

知んぬ、情ある女子は、
いまは人の恨みをも、
なほ縦琴の空鳴に
似ると傳ふる耳もてり。

見よ、王法をやぶりし子、
白き額をうなだれて、
斷頭臺にのぼる如、
吾立ちあがる巖の上に。

吾立ちあがる巖の上に、
涙は雨とあふれ來ぬ、
死を怖れんや、顧みて
あゝつれなきを戀ふればぞ。

さらば地の神、なが領に、
顔かゝやきて胸冷えて、
御苑にたてる石彫の

女神めがみに似にたる子こはなきや。

その裳もの裾すそにひれふして、
報かい無なき戀こ泣なかんより、
寧むろ無む心の牡蠣かが身みの
巖い根ねの夢ゆめを羨うらやむよ。

黒潮くろしほよどむ海うみの底そこ、
戀こも詩し歌かも才さいも名なも、

根ねなき藻草もぐさの一枝ひこに、
花はなを飾あざるに足たらざらむ。

あゝ海うみ、——龍女りうにょ罪つみ知らず
眠ねむれる所ところ、弱よほき子この
唯ゆめ一の院いん家け、——死しの邦くにの
屯たかろとなるをわれ痛いたむ。

海士あまもし知しらばいかならむ、

すなどりすべく來たる朝、
網に死屍を引き揚げて、
臂もぬなく物怖れ。

幸と糧との家として、
日毎な卜める潮路に、
身をも沈めし人ありと、
世の運命を思ふにも。

さもあらばあれ、かの虹の
消ゆるが如く、死の邦に、
潮の底に、故郷に
吾は歸るよ——さらば、さらば。

破甕の賦

火の氣絶えたる厨に、
古き甕は碎けたり。
人の告ぐる肌寒を、
甕の身にも感ずるや。
古き甕は碎けたり、

また顔圓き童女の
白き腕に巻かれて、
行かんや、森の泉に。

裂けて散れる菱形に、
窓より落つる光の
静かに這ふを眺めて、
獨り思ひに耽りぬ。

渴く日誰か汝を、
花の園に交ふべしや。
唇燃ゆる折々、
掬みしは吾が生命なり。

清きもの脆かるは、
詩歌の人に聞いたり。
善きも遂に同トさか、
古き甕は碎けたり。

あゝ土よりいでし人、
清き路を踏みし人、
そらの上を慕ふ人、
運命甕に似ざるや。

古き甕は碎けたり、
壊片を足にふまへて、
心憂ひにえ堪へず、

暮るゝ日をも忘れ去んぬ。

鶯と蝙蝠

春の娘子鶯の
音色うらやむ蝙蝠、
小夜の眠りを窺ひ、
合歡の枝に忍び入る。
緑色したゝる葉どしに、

圓まるき胸むねの血ちを吸すひて、
去さんぬ、月つきなき眞ま夜よ中なか、
老おいに似にたる後うしろ影かげ。

あゝ罪つみふかき蝙蝠かぶもり、

(これさへ神かみの恵めぐみよ)

夜よるの守もりを許ゆるされて、
歌うたも訴うたへもかなはず。

雲くもくれなゐの曉あけつぎ、
嫉ねたみも何なにか、鶯うぐいす、
尊たうとかりな胸むね瘡やせて
なほ朗ほろらに囀せんずるよ。

郭公の賦

民集ひて花鎮め、
春安かれと祈る日、
なぎたる白晝に青き海の
遠く鳴るを聞く如く、
あるは悩みの真夜中、
望みの光りを得たる如く、

今かすかに、明らかに
虚空に鳴けるは何の鳥ぞ。

あら來たりや郭公、
遠く、遠く、また遠く、
心をいざなふその響は、
海棠落つる夕暮、
車駕はせてゆく春の
王子が別れに恨み長う、

血に鳴く鳥の身ならで、
いづれの胸より聞かれ得べき。

木陰地いづる鶯を、
春の小姓と観せば、
この鳥寵なき若き少女、
行方の西を慕ひて
薄月させる野の空、
友なき天路を走り去るよ。

あゝ峠の幾つ越えて、
なんぢが願ひは癒えぬべきや。

悲しい哉、春の領、
王子ゆいて覆へり、
したゝる青葉の夏のうてな、
權威餘りにさかんに、
快樂夢と過ぎ去んぬ。
知らずや、追懐おこるごとに、

悲^{かな}みいよ、新^{あら}たに、
なが歌^{うた}ますく、清^{きよ}しからむ。

野^の邊^べの新^{しん}樹^{じゆ}の葉^はがくれ、
根^ね白^{しろ}葦^{あし}の笛^{ふえ}吹^ふいて、
みぎはの羊^{ひつじ}を呼^よばふ子^こ等^らも、
なが音^ね夕^{ゆふ}に聞^きいては、
静^{しづ}かなる世^よもみだれて、
智^ち識^{しき}も歎^{なげ}きを救^{すく}ひ得^ねトな。

かゝるも何^{なん}の罪^{つみ}ぞや、
悲^ひ哀^{あひ}は類^{るゐ}なき清^{きよ}き誇^{ほこ}り。

快^け楽^{らく}、希^き望^{ぼう}、平^や和^わの
よき名^な弄^{ろう}ずる詩^し人^{じん}よ、
なが卷^{まき}あまりに貧^{まう}しかりや、
われ疑^{うたが}ひのひとり兒^こ、
和^に魂^{たま}つとに煩^{わづ}らひ、
却^{かへ}りて落^おち來^くる鳥^{どり}の聲^{こゑ}に、

人の世知らぬ秘密と、
酒よりあまかる慰籍を知んぬ。

あらずきたりや郭公、

なが音再び流れず。

詩人の想像の馳するところ、

靈鳥とはに死なんや、

寂しいかな空の上、
野こえ山こえ牧場こえて、

さらば、さらば、さらば鳥、
なんぢの行方へ魂魄まよふ。

野にたちて

森の家より野にいでよ、
夕の雲をながむれば、
緋威裂けし落武者の
姿に似たる春の暮。
穂の毛のびたる大麥の

畑にかくるゝ笛の音よ、
背低き邑のまめ男、
戀のうらみのすさびかや。

失ひしもの慕へども、
再びわれに歸り來ず、
こゝには戀と春の日の
いづれ脆きを問ふなかれ。

畑はたよりいでよまめ男をとこ、
悲あなしめる者もの相會あひあうて、
思おもひ出で語りするばかり、
胸むねなぐさむはあらどかし。

深野ふかのの路みちのゆきかへり、
憂うれきを涙なみだに洗あらひ去さり、
君きみが手馴てなれの笛ふえの音ねの、
新あらたになるを樂たのしまむ。

かくてど邑むらにかへる時とき、
春はると戀こひとをうち忘れ、
夏なつ珍めづらしき朝あさかげに、
働はたらかんなかな、弱よほからぬ身みぞ。

金絲雀を放つ歌

有情か、鳥もゆく春の
ながき恨みや身にしめる、
今朝金絲雀の悄悄と、
鳥立によりて餌を啄まず。
患ひて籠を軒にかけ、

聞いて見よとて笛吹けば、
雌は雄の脊に首よせて、
堪へでや羽もわなゝけり。

寧ろ罪なり、狭き室に、
羽いましめて飼はんより、
放いて見うと籠とりて、
南の窓に蓋あけぬ。

見よ、二羽飛んで梅が枝の
青葉のかげにくいり入り、
囁くとのみ聞きしまに、
何處とも無く飛び去りぬ。

巢には卵を残さねば、
鳥は再びかへらんや、
籠を碎きて唯ひとり、
門にもたれて物おもひ。

夕の雲の縹色、
よりに一つに纏まりぬ、
いまその如く金絲雀は、
つがひ離れず飛びしなり。

二羽ある所巢をあみて、
やがて卵と雛あらむ。
あゝゆく春の煩ひに、

稍やなぐさみて歸かへり得うるかな。

『南畝の人』の小引

『南畝の人』は春耕、夏耘、秋獲
冬藏の四卷にわかれて農民の生活
を描かんとする吾が歌なりここに
掲ぐるは其の小引のみ

白羽しらばね箆びらに負おふ射手いての雄をぞゝる騒さわぐ
陣ぢんの前まへ、
戦ほことり勇いさむ若武者わかむしやの勝かちと名譽ほまれを傳つた

ふべき、

高きしらべは弾き馴れず、絃巻き

かへせ詩の神。

罔象童子に變化して野路の宴酔ひ

らく頃、

羊追ひ去る農人の世を咏まんずる

人の手に、

合ふまで優に、和らかに。

銀鉦うてる椅子に凭り盲目の子等

が弾トたる、

緒琴は朽ちて千歳經ぬ、

野がへり吹ける牧笛の音は極めて

細かるも、

器新らし、試みに古へに似ぬ調子

得て、

珍らしがるも、善しとせむ。

かれ、田の畔に鋤ふる身、名は槇

山の阪越えず、

水を渡りて市座に富める榮ゆる願

はねば、

運命の手に身を委ね、禁ずる樹の

實食みもせず、

隠れ家これを神領と、惡趣の世

避け住まふのみ。

唇氣樓胸にかき、地の譽思ひやみ、

愛も平和も健康も快樂希望も絶

えたりと、

衆生怨するなかに立ち、善いかな

種根幸ぞある。

夜は閨に甘き眠を妻と分ち、

日は圃に赤丹穂なる額をあげ、

時に隣人を室に延き、實語りて興

がる日、

醜辛くも睦び合ふ身に歡樂の無か

らずや。

朝夕ふめる牧場みち、草に帯ひく

跡見ても、

顯證ならずや、労働のうちに隠る
る高き旨。

物の微なるに淺からぬ意の奥を悟
り得ば、

なに將軍の旗章風にかへるをうら

やまん、

羊追ふ子も天の上に同ト愛兒の名
ある民、

知る、耻なくて野路山路、

笛吹き得るを、跨がり得るを。

清い哉、牧者の生計、

聖なりな、農夫の務め、

見よ、東風拂ふ野の氷、氷のひま

の若菜草、

春たちかへり佐保姫の装束あがる

代となれば、

流れによれる葦の屋の粉屋の軒の

水車、
みづぐるま

響き^{ひび}てめぐる時は來ぬ^き。

老^{おい}は牧場^{まきば}の垣^{かき}を結^むひ、若^{わか}きは桑^{くは}の

圃^{はた}をうち、

野山^{のやま}にひやく鄙振^{ひなぢり}に行く^ゆ旅人^{たひんど}の耳^{みみ}

ひきて、

疲勞^{つかれ}やすむる、今^{いま}よりぞ。

かの野^のの鳥^{とり}の巢^すを出^いで、晴^はれし虚^こ

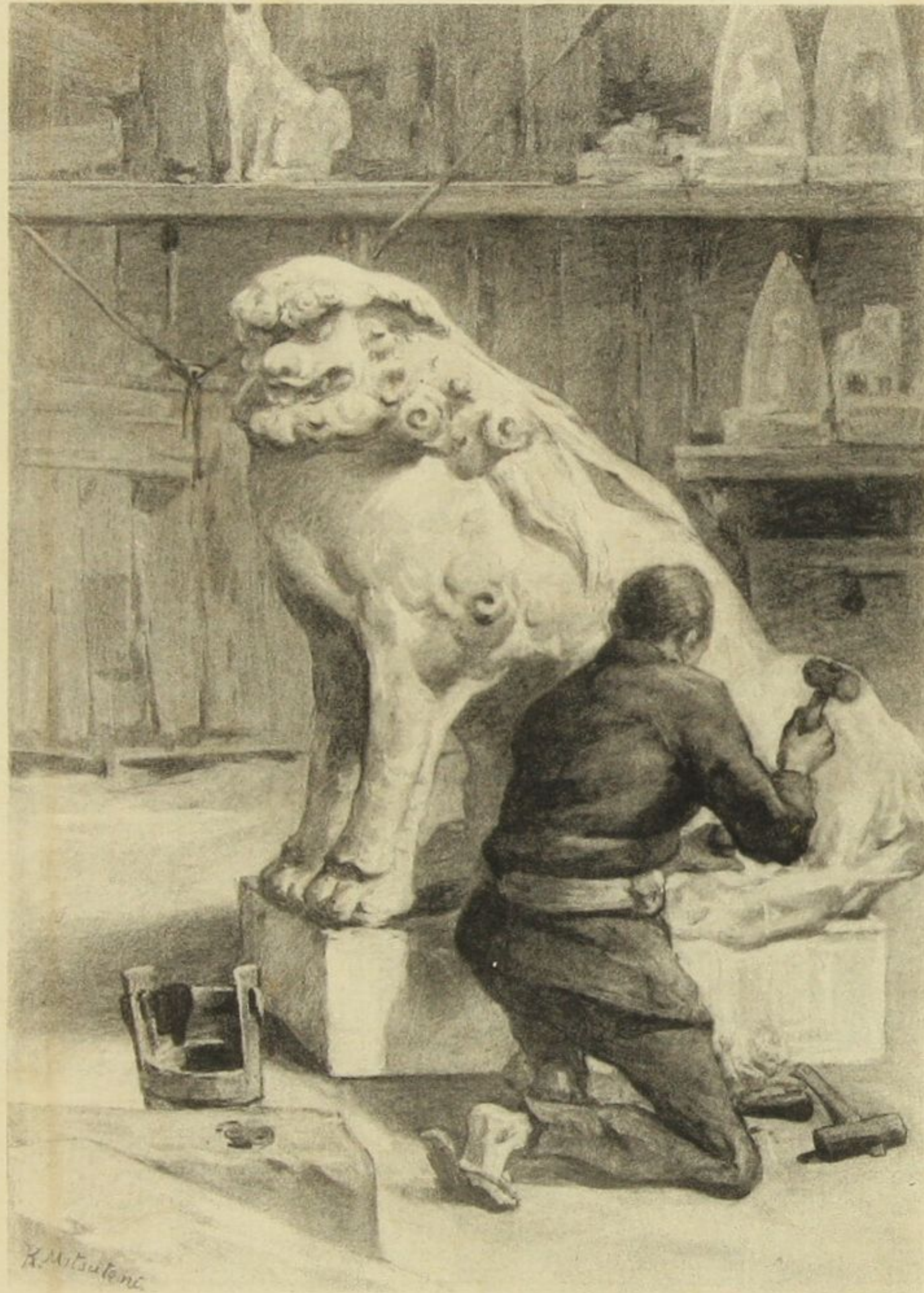
空^{くう}に鳴^なく如^{ごと}く、

古^{ふる}き調^{しらべ}をかきすて、此^この新^{あた}らしき

一曲^{ひいふし}に、

詩^しの愛着^{あいぢやく}をよせてみんかな。

風潮碑その類



石彫獅子の賦

一

番者に問へば石工は、
 木かげの夢に耽りぬと。
 入りて小闇き仕事場に、
 刻みさしたる唐獅子の
 圓き頸を手になで、
 誰ぞ、吟ずるは静やかに。

朽木の棚にすゑられて、
顔くすぼるゝあら彫の
豕、狗兒、野の狐、
さては雄鹿のむらがり、
こは秀でたる驕りかな、
日浴びて立てる獅子の影。
裂けたる岩に爪かけて、
雄々し、憤るかその姿、

鬣たてがみながく背せにまきて、
見みれば湧わきよる春はるの潮うしほ。
胸むねはゆたかに力ちから男をとこが
曳ひきしぼりたる弓ゆみの如ごと。

忿怒ふんね現げんずる明王めうわうの
ひろき肩かたより燃も江えあがる
焔ほのほか、ながき尾おは躍はねり、
綿毛わたげ密みつなる脚あしの裏うら、

落おちて野の薔薇ばらの花はなふむも、
巢すくへる鳥とりはめざめんや。

(石工いしく妙いみトき心得こころによ)

瞳子ひとこ彫とられぬ唐獅子からしは、
光ひかりを知しらぬ盲目めしひの身み、
鼻はなかんばしき香かを嗅かぐも、
いまだ前脚まへあしふみあげて、
花園はなぞの小路こみちみださじよ。

鑿の手またく捨てられて、
御苑の夏のあけぼのや、
緑したる木のかけに、
巨人の如く立たんとき、
雄姿いかに。背に伏して、
しばし想像にふけらせよ。

二

汝の王者かたどられ、
眞白き石に刻まれぬ。
野より山より林より、
つどへよ獸、列なりて
蹄の前にひざまづき、
弱きを耻ぢて僕たれ。
偉なる靈魂くだりきて、
眞白き石に包まれぬ。

野のより山やまより林はやしより、
つどへよ獸けもの、列つらなりて
その光輝ひかりに浴あぶるべく、
卑ひくき心こころをなげうてよ。

大だいなる權威けんいあらはれて、
眞ま白しろき石いしに具ぐせられぬ。
野のより山やまより林はやしより、
つどへよ獸けもの、列つらなりて

王わうにさゝぐる燔祭ぼんさいの
聖せいき火盤ひざらを整ととのへよ。

斑まだらの牛うしと羚羊かもじかは、
ふかき痛手いたでに甘あまんトて、
進すすみて燃もゆる火ひに焼やけよ。
誇ほこるべきかな、犠牲いけにの
高たかきはまれば汝なれにあり、
美うらやむ群むれど愚おろちなる。

見よ犠牲はそなはりぬ、
獅子は額にたて鬘の
ながき流れをふるはせて、
わら起ちあがる、「戦闘と
勝と力の権化なり、
伏せよ、』と呼べば皆伏しぬ。
さかんなる哉、その命や、

自然は死せり永久に、
人は魔のどと強からず、
われは王者ぞ、萬有の
値の源ぞ、煩ひと
悶の胸の主人なり。
あゝ運命の眩きをも、
眼ひらいてながめ入り、
胸わなゝかぬ雄心の

若き勇氣に溢れたる、
勝利のおもひに漲れる、
この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、
われは汝の伴なりと、
聲は喇叭の音に似たり。
時に黙止はやぶられて、
たかき讚美と服従は、

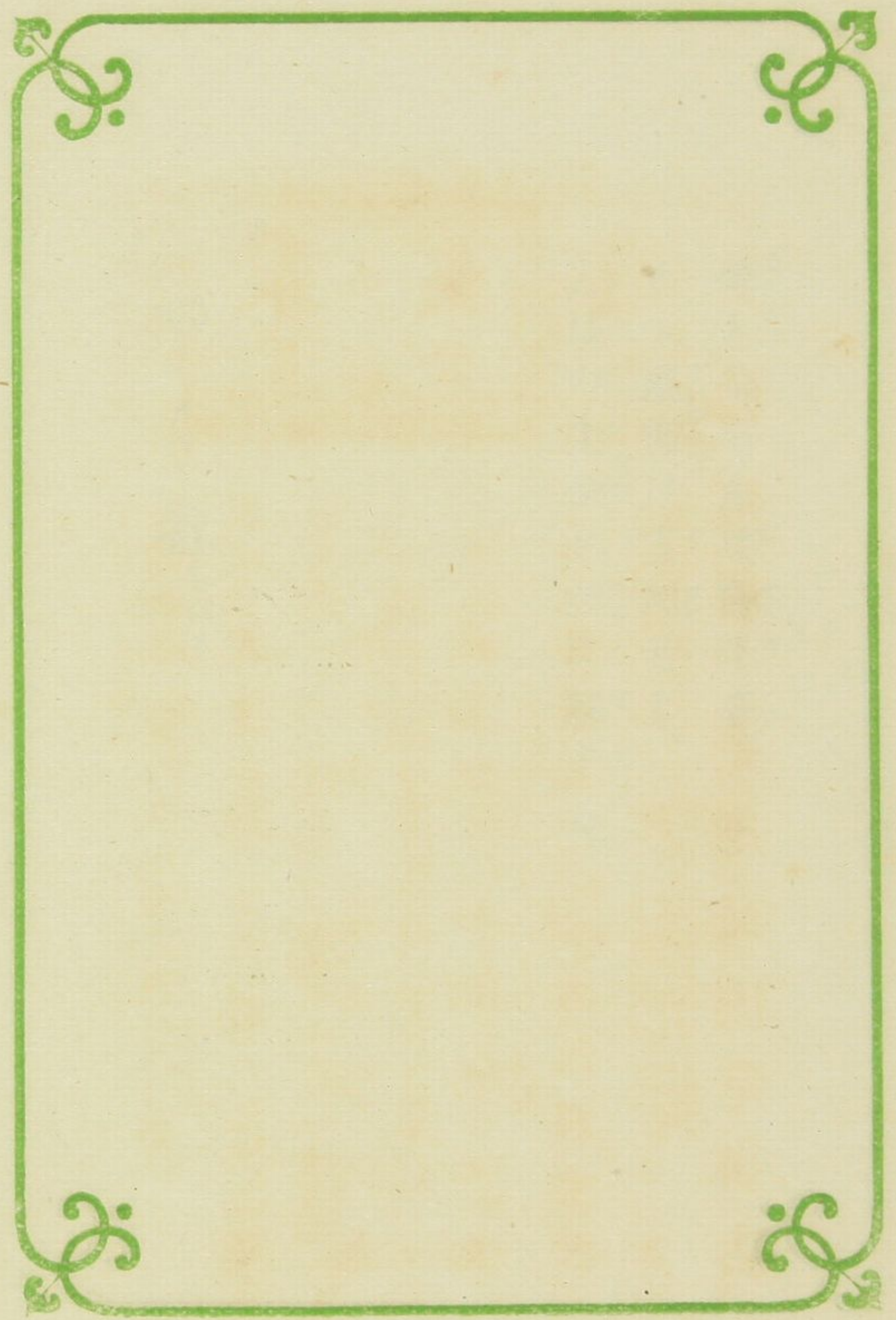
雷のどよみに現はれぬ。

三

いま想像の羽たゆむ。
見れば唐獅子日を浴びて、
豊かにもまた静かなる
すがた何等の誇りぞや。
石彫ながく傳はりて、

榮はなとならんは幾いく千ち歳とせ、
あゝ藝げいじゆつ術じゆつは支し配はいせよ、
とはの生いのち命めいぞ汝なれに歸きする。

や
く
春はる
をばり



明治三十四年十月三日印刷
明治三十四年十月五日發行

金四十錢

著作者 薄田 淳介

大阪市東區南本町四丁目三十六番屋敷

發行者 金尾 種次郎

大阪市東區鑪屋町二丁目七番地

印刷者 江間 傳三郎

大阪市東區本町一丁目卅番邸

印刷所 株式會社 大阪國文社

不許
複製

大阪市東區南本町心齋橋筋東北角

發行所 金尾文淵堂書店

三木天遊君作

川山の心

新體詩集 要目 近日發兌

雨	か	虹	白	ま	ゆ	そ	秋	お	垣	戀	蜘蛛	花	秋	蟲	世	花	を	冬	河	高
の	た	の	百	ぼ	く	な	そ	お	垣	戀	蜘蛛	花	秋	蟲	世	花	を	冬	河	高
ゆ	み	ゆ	合	ろ	な	そ	お	垣	戀	蜘蛛	花	秋	蟲	世	花	を	冬	河	高	
ふ	ぐ	さ	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
暮	さ	さ	曲	吟	藻	外	外	外	外	外	外	外	外	外	外	外	外	外	外	外
(五)	(七)	(七)	(五)	(五)	(五)	(三十一)	(七)	(七)	(七)	(破)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(五)	(五)

首	遺	黄	灘	網	村	夏	月	蛙	連	さ	陽	叛	培	淡	閑	蜻	と	祭	遠	双
夏	夏	葉	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
其	江	を	深	磯	藻	雨	雨	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
他	畔	み	處	邊	屑	来	来	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
數	の	て	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
篇	愁	思	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(五)	(五)	(五)	(五)	(五)	(五)	(五)	(五)	(十)	(七)	(七)	(七)	(破)	(七)	(七)

暮笛集

薄田泣董君新體詩歌集

暮笛集の三版は体裁を更め工夫を凝らしたる新意匠を以て現はれ候卷中の詩も作者少なからず朱を加へ候ゆる自然面目を新たにしたるもの有之候はんと存ト候世の事物の日を経れば陳くなり行くが中に詩歌のみは常に新らしく美しく候幸福なるは詩集を携ふる人と存ト候まゝ書肆は諸君に暮笛集を勧め候 實價卅五錢郵税四錢に候

來出版四第

果花無

麗美本製繪口刷色版パイタロコ

一條成美君畫

己るも子小にの庭舊た葉が懸の委
 に文共弟説依如と套るは幸多て的沈
 四壇にもにりき社をば春田數小を滯
 版を熟讀し遂女會脱雨露應説募
 を譽讀むてに主のし氏伴募募て
 重醒をべ同和人描て材の三の集大
 ねせ慣く時氣の着の無大家什！毎
 ると、父家々温り宗花家ののたる
 にす若兄庭に樂及る取、查撰は聞
 於夫もに於樂及びあり此に評天か
 てかれ讀むけ天びあり此に評天か
 知は此むけ天びあり此に評天か
 れ發傑べる地希ら信作依者下壘
 兌作く頁と望ゆ仰はて坪の内己金
 後が教好なると悲人來一博に五
 數如育なり頁心劇情の陳に、る圓
 十何家るゆ心劇情の陳に、る圓
 日にも讀くのがの陳に、る圓
 に寂宗物、復頁衝腐當尾所のら
 ！寛教な光活厚突な撰崎な賞ん
 てた家り明と珠家る！紅るをど

中村春雨君作

錢六稅郵 錢五拾四金

集詩體新入繪刊月

さく春

日五月十日要集壹第

遊	夏戀う罪	山少	雨か	花二	失	馬
東	ののた	茶	のたみ	羽の	せたる	塲辰
日	白		夕く	瓶鳩	針	猪
記	雲矢げ	花妹	暮さ			
水	蒲	桑	三	山	河	高
落	田	田	木	本	井	安
露	泣	春	天	露	醉	月
石	葦	風	遊	葉	茗	郊

(刷色版パイタロコ) 畫名米歐
 (家畫年青及家名代當) 畫插刷色

錢五拾金 共稅郵

著君芳幽池菊

んやちつよ

本美珍寸の前空

爲山君意匠表装

金文字及上下金箔引

よつちやんは今年五つの子の女で著者菊池幽芳君の令嬢ですが少々の虚飾もなく眞率なる温かき同情の筆を以てその平生を詩的に書かれたものでよほど趣味の多い冊子です兒童研究に志ある人には善き参考となり世の母たり妻たるものには如何ほと興味深く感ぜしむるでせうか恐らく一度この本を繙いたものはよつちやんの面影を長く忘れることは出来ずまいそれにとこの冊子の體裁の可憐に美しくい事はたしかに出版界を驚かすに足るべきものだと固く信ずる處です

コロタイプ版五葉挿入再版出来

錢四拾四金 錢四拾

著雜學文君客歌々浩田角

出門一笑

郵金 稅參 四拾 錢錢

「老僕とわれ」野花「風頭語」賣社翁等小品文數十を集め一篇無韻詩といふべきものなり紀行あり「讚岐名勝」の如きは好箇詩趣に富める讚岐の案内記なり「向上一路」啓行「勾花」の如きは人生觀のある所を見るべし蓋し著者の詩想は理趣に饒むを以て長とく抽象に過るを以て短とすその人生と自然に涉りて一味の詩致感興深きは今日の文壇に在りてまた一家獨得たるを失はずといふべし卷末に康有爲の大平論あり南海の哲理の一斑を紹介したるものなほ著者が理を好む所を見るべし（大阪朝日新聞批評）

詩國小觀

郵金 稅四 拾 錢錢

「長明、魯望、淵明、屈原嗚呼誰之宇宙は長へに宇宙の外に遯るを得ず」と夫れ然り人間は遂に人寰を脱する能はずといふかコレわが浩々歌客子が仰いて天地萬有の象を觀し俯して人生有情の理を會得せらるるに適し憶ふに人間として富士の山麓に生れたる子は幸福なりき可憐なる「詩國小觀」の一部之をとりて讀み來れを時に崇趣奇趣自ら湧くものあるを覺ゆめり（大阪毎日新聞批評）

月刊文藝雜誌

小天地

薄田泣董浩々歌客主幹
 第二卷第一號要目
 極彩色八度摺新案四枚續繪葉書畫題：(戀の樂) 廣瀨勝
 平露伴先生最近肖像コロタイプ版
 少女(表紙畫)月(彩色口繪)白露(色摺挿畫) 丹羽默仙
 初嵐(長篇小説)柳川春葉 獅子檻(長篇小説) 中村春雨
 復活の街 生田葵山 消夏漫筆 菊池幽芳
 偶言數則 中島孤島 こほろぎ 與謝野鉄幹
 戀物語 河井醉茗 片こほろぎ 鳳晶子
 南の園 山本露葉 時文雜觀 松崎天民 旅家藝人
 大阪精神病院 松崎夫人 俳優金蘭簿
 日本觀察談り 募集小品 和歌俳句
 初七日の文壇 彙報 新刊紹介
 材料豐富趣味横溢
 金二十錢 郵税一錢五厘
 第一卷自第一號十册特別金一圓五拾錢

掲載要目

極彩色繪葉書
 ○口繪
 ○肖像
 ○新作小説
 ○雜錄
 ○文苑
 ○評論
 ○社會
 ○譚園
 ○藝苑
 ○彙報
 ○新刊紹介

坪内逍遙君閱 梅澤和軒君著

菅公論

製本既成 金參拾錢
 郵稅四錢

本書は菅公論の傳なり所論的確老更獄を斷するが如く其井上高山大町諸氏の所説を批判す縦横所説を批判せる眞に文壇の逸品なり今や菅公の一千年は來らむとす右流左死の眞相を窺はむと欲せば須く一本を座右に備へ給ふべし

芝蘭集

コロタイプ扉 金貳拾錢
 色ッロス綴 郵稅貳錢

新案金蘭簿
 信仰、希望、長短、最幸、最非、天然、季節、人物、人品、聲色、書籍、花木、動物、器具、題銘の各欄にわかちて友の面影を二頁に一のバ、むる新案の金蘭簿也

車百合

第二卷第二號 金七錢
 九月末日已刊 郵稅共

月刊俳諧雜誌
 掲載要目 筆蹟○俳諧○評論○評釋○文章○雜吟○募集句○地方通信○其他

近日美裝出版

七日間

極彩色木版口繪釘裝美麗

坂田耕雪君畫

こゝに最も美にして最も大膽なる
 最も狡獪にして最も機敏なる絶世
 の一佳人あり六尺有餘の男子一掀
 一翻せられつゝ相共に生死の境を
 彷徨す讀むもの心膽を寒うせずん
 ば止まず讀者を激せしめその最後
 まで讀了せずんば安んずる能はざ
 らしむるもの蓋し本篇の如きは無
 からん

菊地幽芳君作

金三拾五錢 郵稅六錢

歐米漫遊記

川上音二郎
川上貞奴

金四十錢
郵稅四錢

漫遊旅行案内

旅行家の好伴侶
製本美麗

金三十錢
郵稅四錢

五度摺極彩色
繪葉書十二葉

附錄

▲松島 ▲宮島 ▲真見瀨 ▲橋立 ▲墨堤 ▲奈良
 ▲大磯 ▲有馬 ▲江の島 ▲住吉 ▲長良川 ▲金閣寺

讀書案内

讀書家の好伴侶
第壹號既刊

郵稅共金參錢
一年分金卅六錢

掲載要目

○口繪 ○論說 ○史傳 ○叢話 ○雜錄
 ○文苑 ○彙報 ○新刊紹介

中村春雨君作
丹羽默仙君畫

小說
雛

近刊豫告

鳩

製本美裝



新編